

保健師教育課程選択制の大学における 学生の保健師志望の実態

——A大学における保健師教育課程選抜試験受験の背景——

松本千晴¹⁾，大河内彩子²⁾

抄録

目的：保健師教育課程選択制の大学における，学生の保健師教育課程選抜試験受験の背景を明らかにする。

方法：A大学の保健師教育課程4年生14人に，個別で半構成的面接調査を実施した。選抜試験受験の背景やきっかけと判断できる語りを抽出してコードを作成し，質的記述的分析を行った。

結果：選抜試験受験の背景として，【「手に職」志望】【親の勧め】【保健師との接点】【公衆衛生看護学的視点の素地】【公衆衛生看護学への関心】【将来の職業への迷い】【保健師になる初志の貫徹】の7つのカテゴリーが抽出された。

考察：学生の多くは，【「手に職」志望】であった。そのなかでも，入学前から【保健師との接点】があった者や，これまですごしてきた家庭環境・社会環境の影響を受け【公衆衛生看護学的視点の素地】をもつ者は，入学時点で保健師になることを志望していた。さらに，彼らは，【保健師になる初志の貫徹】により選抜試験を受験する傾向にあった。ほかにも，【親の勧め】が影響し受験する者もいた。入学後は，【公衆衛生看護学への関心】がもてるような講義や実習を展開することで，学生が保健師を将来の職業の1つとしてとらえ，保健師教育課程の履修を希望する可能性がある。また，選抜試験を受験したものの，保健師と看護師のどちらにするか【将来の職業への迷い】を抱く学生の内情も垣間みれた。そのような学生に配慮した教育や職業選択における支援も必要である。

【キーワード】職業選択，保健師教育，学生，選択制

日本地域看護学会誌，25(2)：40-47，2022

I. 緒言

わが国の就業保健師数は，2018年末現在52,955人であり，2008年末の43,446人から21.9%増加している¹⁾。地域住民の抱える問題やニーズの多様化・複雑化を背景に，保健師の活動の場は拡大し，公衆衛生看護の実践能力を高めるために保健師基礎教育の充実が求められた。また，1992年「看護師等の人材確保に関する法律」の施行後，保健師養成所数の増加に伴って，実習施設の確保，

実習での経験のむずかしさが指摘された²⁾。このような現状をふまえ，保健師助産師看護師法の改正により，保健師教育の修学年限は延長され，看護系大学の卒業要件から保健師国家試験受験資格が外された。現在，保健師教育は，各養成所の教育理念・目標に基づき，大学での全員必修もしくは選択制，1年間の専攻科，2年間の大学院のいずれかで実施されている。2017年度において，保健師教育課程は，大学(選択制)207校，大学(必修)26校，大学院10校，短大専攻科5校であり，大学(選択制)が全体の83.5%を占めている³⁾。

選択制の大学の大半は，定員上限を設け，筆記試験や面接，成績(GPA等)の評価などの選抜方法をとってい

受付日：2021年9月13日／受理日：2022年2月25日

1) Chiharu Matsumoto：熊本県立大学総合管理学部

2) Ayako Okochi：熊本大学大学院生命科学部

る³⁾が、定員上限や選抜方法を設けていない大学もある⁴⁾。また、選抜時期も2年次後期が47%を占めるものの大学によってさまざまである³⁾。このように選択制の大学におけるカリキュラム体系は多様であるが、いずれにしても、選択制の大学に在籍する学生は、入学後に保健師教育課程へ進み、保健師を将来の職業の1つとして選択できる機会を得る。

これまで、看護大学生を対象にした進路やキャリアに関する先行研究は数多く存在するが、保健師の職業選択に限定した研究はわずかであった。学生の保健師志望には、保健師に対する認知や関心、資格志望、親の勧め等が関係していることが報告されている⁵⁻⁷⁾が、これは、保健師に限らず、看護職志望の場合でも同様であった^{8,9)}。

三輪ら⁷⁾は、1大学において、選抜試験を受験した学生の7割が「多くの資格がとれる」を受験理由としてあげ、保健師としての就職を志望していた者はわずかだったことを報告している。さらに、保健師教育課程に応募する学生の少なさを課題とする大学もある¹⁰⁾。古城ら⁸⁾は、大学進学時点での主体的な職業選択が卒業後のキャリアコミットメントにまで影響を与えると述べている。このことから、選択制の大学の場合は、保健師教育課程の選択時点において、学生が主体的に職業選択をすることが、卒業後のキャリアコミットメントにまで影響を与えたと考えられた。

しかし、これまでの研究において、選択制の大学で、学生が保健師教育課程を選択する背景やきっかけについて明らかにしたものは見当たらなかった。

そこで、本研究では、選択制のA大学において、保健師教育課程の学生に半構成的面接調査を行い、保健師教育課程選抜試験を受験した背景やきっかけを明らかにすることを目的とした。本研究により、選択制の大学における学生の保健師教育課程の履修希望につながる教育や職業選択における支援のあり方を提示することができると考える。

II. 研究方法

1. 研究対象者

研究対象者は、A大学で保健師教育課程を履修する4年次生20人のうち、同意を得られた14人である。なお、本研究において、保健師志望とは保健師免許取得志望のことを指す。

2. 調査方法

半構成的面接調査を行った。研究者1人が個別に面接し、インタビューガイドに従って、1人あたり30分程度の聞き取りを行った。対象者の了解を得て、発言内容を録音した。調査期間は2018年3月であった。インタビュー内容は、①入学時に志望していた職業（複数回答可能とした）、およびその職業志望に影響したこと、②選抜試験受験に影響したことである。①において、保健師ではない職業を志望していた学生には、②選抜試験受験までの過程において、なぜ保健師も将来働く職業の候補として加わったのかについてたずねた。なお、A大学においては、保健師教育課程に進むにあたり選抜試験を設けている。

3. 分析方法

分析方法は、質的記述的分析を用いた。本研究は、学生の保健師教育課程選抜試験受験の背景やきっかけとしてなにかがあるのか、その現象を記述し、理解することが目的であるため、質的記述的分析が適していると考えた¹¹⁾。録音データから逐語録を作成し、語りのなかで、選抜試験受験の背景やきっかけと判断できる発言を抽出した。前後の発言内容を考慮して要約を作成しコードとした。そのデータ内容の類似性に沿って分類し、抽象度をあげ、サブカテゴリー、カテゴリーとした¹¹⁾。

4. A大学の保健師教育に関するカリキュラム体系

2012年度入学生より、保健師教育を選択制とし、3年次に選抜試験を実施し20人を養成している。看護学生は3年次に初めて、公衆衛生看護学関連の科目を履修する。3年次の前期前半において、全員が必修として10科目（11単位）を履修する。その後、選抜試験を実施し、合格した20人が保健師教育課程履修学生となる（以下、保健師学生と記す）。保健師学生は、さらに、3年次前期後半に6科目（7単位）、4年次に4科目（8単位）を履修する。保健統計学（2単位）は、1年次に学科全学生の必修科目となっている。また、公衆衛生看護学実習は、4年次の4～5月に市町村実習（4週間）、8月に保健所実習（1週間）を履修する。特徴として、公衆衛生看護学関連の科目はIとIIにわかれているものが多く、Iは看護学生全員必修、IIは保健師学生のみ必修とされていることがあげられる。このカリキュラムは、2017年度入学生までである。

5. 倫理的配慮

研究者と対象者は、教員と学生の関係であったため、強制の下での承諾にならないよう十分に留意した。対象者が一堂に会する場で、説明文書を元に口頭にて、研究の目的、自由意思の保障、承諾をした後でもいつでも参加を撤回できる権利を説明し、参加拒否や撤回により不利益を被らないこと、結果の公表意図があることを説明した。その後、研究協力の意思表示があった学生に対して個別で口頭にて同意をとった。同意撤回においても口頭での申し出とした。また、本研究への不参加やインタビュー内容が、対象者の成績に影響しないことを保障するため、研究者が担当する科目の成績が確定後に本研究を実施した。面接は、対象者が所属する学科棟の一室で行った。

なお、本研究は熊本大学大学院生命科学研究部等疫学・一般研究倫理審査会の承認を受けて実施した（承認年月日：2018年2月28日、承認番号：倫理第1493号）。

Ⅲ. 研究結果

1. 対象者の概要

入学時の志望職業は、保健師5人（事例1, 4, 5, 6, 7）、保健師か看護師2人（事例2, 3）、看護師5人（事例8, 9, 10, 11, 12）、養護教諭2人（事例13, 14）であった。卒業後に就職する職業は、保健師8人、看護師6人であった。

2. 保健師教育課程履修希望の背景

総コード数42で、サブカテゴリー20、カテゴリー7が抽出された。

カテゴリーは、【「手に職」志望】【親の勧め】【保健師との接点】【公衆衛生看護学的視点の素地】【公衆衛生看護学への関心】【将来の職業への迷い】【保健師になる初志の貫徹】であった。表記は【 】カテゴリー、〈 〉サブカテゴリー、“ ”対象者の語り、（ ）筆者による補足を示している。カテゴリー、サブカテゴリー、コードおよび関連事例の番号を表1に示す。また、抽出したカテゴリーとサブカテゴリーの関係性を表すと図1のとおりである。

1) 【「手に職」志望】

学生の多くは、入学前から〈医療職志望〉であった。また、〈資格志望〉により、選抜試験を受験している者がいた。学生は、“まずは資格がほしい。とれるならがんばりたい”（事例5），“（養護教諭になるには）保健師

をもってほしいのかな”（事例14），“資格があって、女で手に職をもっている仕事にとりあえず就きたい”（事例9）と考えていた。

2) 【親の勧め】

学生は、〈親からの医療職の勧め〉や〈親からの資格取得の勧め〉があったと語った。なかには、〈親からの保健師の勧め〉があった者もいた。選抜試験前には、公衆衛生看護学実習も経験してから将来の職業選択をするように〈親からの実習経験の勧め〉を受けた者もいた。

3) 【保健師との接点】

〈身近に存在する保健師〉とは、自身の母親や姉・友人の母親のことを指し、その者から仕事の話を知ったり、実際に働く姿をみる経験をしていた。また、〈家族や友人の話から保健師を身近に感じる経験〉では、保健師との関わりがあったり、地域保健活動をしている家族や、大学の友人から保健師の話を知り、保健師に興味を抱いていた。

“じいちゃんが民生委員でお母さんが母子保健推進員をしていて、保健師さんとも関わりがあったんで、あの人が保健師だって知って、ちょっと楽しそうになって”（事例6）。

“いちばん大きいのは、（事例1）さんが保健師にずっとなりたいといっていて。そのときはまだ看護師とっていたんですけど、ずっといっしょにいたので。その（保健師の）話を聞いて、あ〜いいなと思ったのが、たぶん最初だと思います”（事例8）。

さらに、入学前に〈マスメディアをとらした保健師との遭遇〉によって、保健師に興味をもった者もいた。

“高校生のときに進路の授業とかで、仕事・職種とかが一冊にまとめられた本を読んで探さなかで、元々医療系には興味があって。そのなかで行政の仕事にも興味があって。その両方ができる仕事ということで行政保健師というのがあるというのを知って”（事例7）。

4) 【公衆衛生看護学的視点の素地】

高校時代までに【公衆衛生看護学的視点の素地】がある者がいた。彼らは、親や学校の教育、育った環境の影響を受けて、〈入学前からの社会経済的側面への関心〉〈入学前からの予防や保健への興味〉〈入学前からの行政への興味〉をもっていた。

“私〇〇市の出身なんですけど、結構貧困率とかすごい高いところで。恵まれないっていったらあれですけど、シングルマザーとか家庭環境とかが、自分はそれで不便を感じたことはなかったんですけど、そうい

表 1 保健師教育課程選抜試験受験の背景

【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞	コード	事例No.
「手に職」志望	医療職志望	元々医療職を志望していた	1, 2, 3, 6, 9, 10, 11
		医療職に興味やあこがれがあった	7, 9
	資格志望	看護師+αの資格をとりたかった	5, 9, 13, 14
		資格や手に職をもっている仕事に就きたいと考えた	9, 11
親の勧め	親からの医療職の勧め	親から医療職を勧められた	5, 14
	親からの資格取得の勧め	親から資格取得を勧められた	7, 12
	親からの保健師の勧め	親から保健師の資格取得を勧められた	4, 11
	親からの実習経験の勧め	親から公衆衛生看護学実習を経験した後に、将来の職種選択をすることを勧められた	13
保健師との接点	身近に存在する保健師	保健師の母の働く姿や話を見聞きし、保健師の仕事イメージできていた	1
		保健師の姉から仕事の楽しさを教えてもらった	10
		保健師をしている友人の母親から、活動の話聞いて楽しそうだった	2
		保健師の知り合いがいて、入学前に保健師のことをある程度理解していた	4
	家族や友人の話から保健師を身近に感じる経験	定期検診を受けている家族から、保健師という職種を教えてもらった	3
		地域保健活動をしている家族から、保健師の話聞いて関心が向いた	6, 13
	マスメディアとおとした保健師との遭遇	保健師の母をもつ友人から、保健師の話聞いて保健師に惹かれた	8
		職種検索サイトで、保健師という職種に偶然行きついた	5
		インターネットで保健師の資格や仕事を調べた	6
		さまざまな職種を紹介する本を読んで、保健師に興味をもった	7
公衆衛生看護学的視点の素地の興味	入学前からの社会的側面への関心	教員の母親から、家庭環境の話聞く機会が多かった	7
	入学前からの予防や保健への興味	家庭環境に課題を抱える同級生を多くみてきて、漠然と疑問をもつようになった	7
		父親に日ごろから健康を意識づけられていたため、予防医学に関心をもった	5
		高校生のときにWHOの感染対策のビデオをみて、予防や保健に関する仕事の深さを感じた	7
	入学前からの行政への興味	元々は行政の仕事に興味があった	7
公衆衛生看護学への関心	講義や課外活動とおして生じた保健師への関心	公衆衛生看護の講義を受けて、予防に働きかける職種として保健師を知った	8
		公衆衛生看護の講義を受けて、保健師に魅力を感じた	3, 8
		認知症に関連するサークル活動を通して保健師に魅力を感じた	2
	公衆衛生看護学と自身の関心事の近さ	公衆衛生看護の講義の方が楽しいと思った	5
		公衆衛生看護の講義内容の方が自分の関心事と近かった	7
		病気の家族のために公衆衛生看護の知識を生かしたいと思った	4
	実習とおした公衆衛生看護的視点の芽生え	基礎看護学実習とおして予防の必要性を感じた	3, 10, 11
保健師のイメージを明瞭にする必要性	基礎看護学実習で患者家族のことも考えるようになった	3, 11	
	さらに学習して、保健師をより理解することが重要だと考えた	6, 10, 13	
将来の職業への迷い	職業選択で揺らぐ気持ち	保健師になるか看護師になるかで揺らいでいた	1, 6, 10
	看護師になることへの迷い	基礎看護学実習とおして、自分は看護師には向いていないと思った	5
		基礎看護学実習とおして、看護師で働き続けることのむずかしさを感じた	9
		基礎看護学実習で、看護師の態度が怖くつらかった	12
	最善の職業選択の模索	長年働ける職種として、看護師よりは保健師の方がよいと考えるようになった	9
	元々の志望職種に近い保健師になろうと思った	12	
保健師になる初志の貫徹	保健師になる初志の貫徹	元々保健師になりたかった	2, 6
		保健師になりたいという思いが続いていた	1, 5, 7
		選抜試験の受験は自然な流れで、初志を貫徹した	1
		選抜試験対策について、先輩にリサーチしていた	1

う人が同級生にたくさんいるというのをみてきたので何が違うんだろう(と思っていた)”(事例7)。

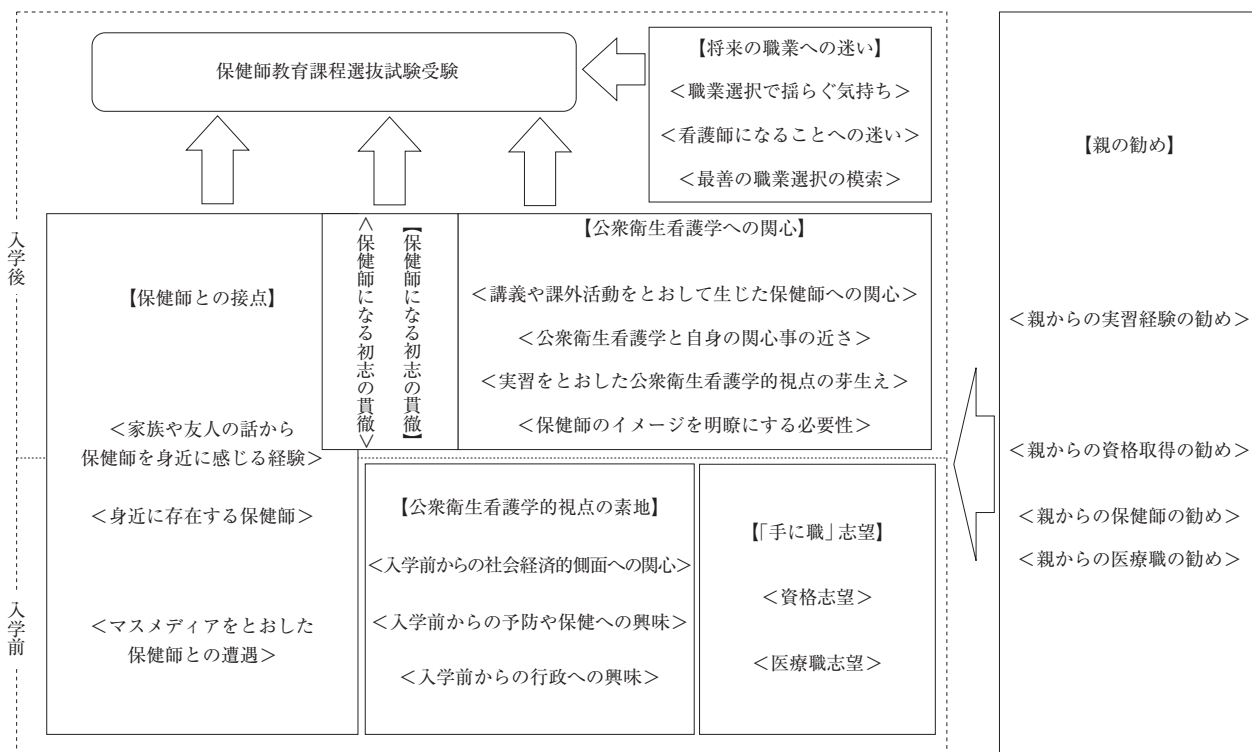
5) 【公衆衛生看護学への関心】

選抜試験前の公衆衛生看護に関連する＜講義や課外活動とおして生じた保健師への関心＞により受験している者がいた。学生は講義やサークル活動とおして、健康や予防に関わる職業として保健師を理解し、保健師に

魅力を感じていた。また、＜公衆衛生看護学と自身の関心事の近さ＞を語る者のなかには、病気の家族のために公衆衛生看護の知識を活かしたいという具体的な目的意識をもっている者もいた。

“保健師の授業、健康教育があって、保健師というのに魅力を感じた”(事例3)。

“保健師の実習をまだしていなかったもので、あまり



【 】：カテゴリー、< >：サブカテゴリー

図1 保健師教育課程選抜試験受験の背景

わからなかったけど、勉強していて保健師の勉強の方が楽しいと思うのもありました”（事例5）。

さらに、基礎看護学の<実習をととした公衆衛生看護学的視点の芽生え>が生じたことが受験につながっている者がいた。A大学では、選抜試験前に基礎看護学実習を履修する。その実習をととして、患者家族にも目を向けたり、予防の必要性を感じる経験をしていた。

“病気になる前に自分で気をつけておけばよかったとか、退院した後の生活が自分だけでは不安という人も結構いらっちゃって、自分もそこに関わっていきたいと思うようになって、保健師になろうかなと思いました”（事例10）。

一方で、学生のなかには、現時点では保健師を十分に理解できていないと考え、これからの講義や実習をととして<保健師のイメージを明瞭にする必要性>を感じている者がいた。

“3年生前期で、授業で（公衆衛生看護学の）勉強はしていたけど、やっぱり実習に行ったこともなければ、いままで生きてきて保健師に会うこともなかったので、あんまり具体的なイメージがつかなくて、（中略）（選抜試験）をとりあえず受けて、（保健師）を知ることが大事だと”（事例13）。

6) 【将来への職業への迷い】

学生は、選抜試験受験時点では、<職業選択で揺らぐ気持ち>を抱えていた。入学時に保健師を志望していた者は、基礎看護学実習をととして患者の身近でサポートの成果を実感できる看護師にも惹かれていた。また、入学時に看護師を志望していた者も、保健師とどちらにするか迷いを抱えながら選抜試験を受験していた。

その他、基礎看護学実習をととして、初めて立てた看護計画が的外れで自信をなくしたことや、学生に対する看護師の態度が怖かったこと、看護師は定年までは働けないと思ったことにより、<看護師になることへ迷い>が生じている者がいた。元々の志望とは反して、看護系大学に入学した者は、現時点における<最善の職業選択の模索>の結果、保健師になろうと考え、選抜試験を受験していた。

“（元々、看護師）志望ってわけではなかったので、それ（看護師）よりも保健師の方が市町村というのがあって公務員というのもあって、（中略）保健師の方がいいなって思ったんです”（事例12）。

7) 【保健師になる初志の貫徹】

入学時に保健師を志望していた者は、入学時からの<保健師になる初志の貫徹>や自然な流れで選抜試験を

受験したと語った。

“(保健師に)なる気満々だった。先輩とかにどういう勉強したらいいですか、どういうことが試験に出ますかってリサーチはして、ちょっと部活の先輩に聞いてたりしました。自然に、ナチュラルに(受験した)”(事例1)。

IV. 考 察

まず、本研究の対象学生は、入学前からその多くが【「手に職」志望】であった。そのなかでも、入学前に、保健師について見聞きしたり、調べたりして【保健師との接点】がある者や、保健に興味をもつ等の【公衆衛生看護学的視点の素地】をもった者は、入学時点で保健師を志望していた。さらに、その7人中5人が【保健師になる初志の貫徹】をして、選抜試験を受験したと語った。これは、前田らの研究結果⁶⁾である「大学進学理由として保健師を目指していた人は、実習前の保健師職業選択志望も高い」を支持するものである。上記5人は、入学時点での主体的な職業選択が選抜試験受験時まで継続していた。

【保健師との接点】には、親や家族が重要な役割を果たしていた。身近に保健師がいると語った者が4人いたが、一般的に、保健師が身近にいることはまれである。身近に保健師がいない場合、学生は親や祖父母から、具体的な保健師活動の話聞いて保健師に興味をもち、選抜試験受験へとつながっていた。

三輪ら⁷⁾の研究では、選抜試験を受験した理由の4割弱が親等からの勧めであった。この勧めの詳細は不明であったが、本研究より、【親の勧め】とは、医療職や資格取得の勧めのほかに、保健師の勧めもあることが明らかとなった。

また、医療や教育分野で勤める親や、育った地域の環境、高校での授業の影響を受けて、入学前から予防や保健、社会経済的側面に関心を向け、【公衆衛生看護学的視点の素地】をもつ者がいた。彼らは、インターネットや書籍等の〈マスメディアをとおした保健師との遭遇〉も加わって、選抜試験を受験していた。これは、白鳥の研究結果¹²⁾と同様であり、個人特性である家庭環境のみでなく、社会環境である学校集団、マスメディア等の影響も受けて、保健師のイメージを形成し、保健師教育課程の履修を希望したと考えられた。

以上のことをふまえると、入学前に【保健師との接点】

をもっているか否かが、保健師教育課程の履修希望に影響すると考える。看護大学生は、身近に医療従事者がいない場合、マスメディアで看護職を理解して入学している^{8,12)}。また、やりがいなどの自己実現を将来の生き方として望んでいる高校生は、進路に関する資料やパンフレットの閲覧という進路探索行動をとる¹³⁾。そこで、容易に〈マスメディアをとおした保健師との遭遇〉ができれば、入学時点で志望職業として保健師を考える学生が増え、保健師教育課程の履修希望へとつながる可能性がある。具体的には、大学ホームページの学部等の紹介において、保健師教育課程を分かりやすく表示し、さらに、保健師教育機関協議会¹⁴⁾や関連学会のサイトへリンクできるようにする方法を提案したい。

次に、入学後において、学生達は、選抜試験前までの講義や実習で【公衆衛生看護学への関心】を抱き、選抜試験を受験していた。しかし、そのなかには、さらなる学習をとおして、〈保健師のイメージを明瞭にする必要性〉を感じている者もいた。このことから、A大学においては、選抜試験前の公衆衛生看護学に関連する講義等で、保健師の魅力を伝えることや、学生の関心事へのアプローチができて一方、保健師のイメージが十分に湧いていない学生もいることが明らかになった。本多ら¹⁵⁾は、職業への明確なイメージをもつことが職業決定をスムーズにすることを明らかにしている。よって、保健師のイメージが明瞭になることを意識した授業展開が、保健師教育課程の履修希望につなげるために有効であると考えた。具体的には、講義では、映像を用いる、物語的に保健師の活動を伝える、体験を重視した演習や実習、保健師の実際の活動を聞く機会をもつ等が考えられる。西岡ら¹⁶⁾は、看護学生は自分で考える学習を楽しんでいると報告しており、本研究においても、学生が授業の具体例としてあげた「健康教育論」は、学生自ら健康教育の企画書等を作成し、学生達を対象者として実践する演習であった。ほかには、保健師のイメージをより明瞭にしたいという学生の知的探求心を刺激するように、より詳しい内容は保健師教育課程に進んでから学ぶといった続編の科目も組み込んだカリキュラム構成にする方策もあると考える。

【将来の職業への迷い】では、基礎看護学実習での看護師へのネガティブな感情や経験によって〈看護師になる迷い〉が生じ、選抜試験を受験する者もいることが明らかになった。白鳥¹²⁾は、大学の専攻科を決定する段階で「看護の積極的選択/消極的選択」があると指摘し

ているが、本研究の対象学生においては、選抜試験の前に、「保健師教育課程の積極的選択／消極的選択」をしていると推察された。入学後、自分の興味や関心を保健師へ焦点化させ「保健師教育課程の積極的選択」をする学生がいる一方で、看護師になることへの躊躇から「保健師教育課程の消極的選択」をする学生もいる。後者の学生は、今後、保健師教育課程で学びを進めるなかで、保健師になることへの迷いや惑いを抱く恐れがある¹²⁾。

A大学では、1年次前期に、看護職（保健師・助産師・看護師）で働く卒業生から仕事の話の聞く機会を設けている。【将来への職業への迷い】があるなかで、保健師教育課程を選択している学生達の実情をふまえ、看護師から保健師に転職するケースもあることを経験者の体験談などで学生がイメージできるようにし、保健師教育課程の選択を後押ししたり、保健師教育課程の履修継続をあきらめないように働きかけることも必要だと考える。

実習は、将来の職業選択に大きく影響する機会となる⁶⁾。A大学においても、選抜試験前の基礎看護学実習で公衆衛生看護学的視点が芽生えている学生がいた。2022年度入学生からは、統合分野として「地域・在宅看護論」が導入される。この「地域・在宅看護論」を選抜試験前に実施し、予防や地域での生活者の視点を教授し、さらに、学生が実習でその視点の大切さを実感できることで、【公衆衛生看護学への関心】をもつ者が増える可能性がある。今後、この実習が学生の保健師教育課程の履修希望に効果があるかを検証し、その結果を踏まえた実習を展開することで、「保健師教育課程の積極的選択」をする者が増えると考えられる。さらに、教員には、学生の保健師に対するイメージやその変化を、保健師教育課程履修後の講義や実習のなかで確認し、実際と異なる場合はそれを補正しながら、学生が自分の強みや課題、目指す看護職像と照らし合わせて、自信をもって将来の職業を選択できるように支援することが求められる。

本研究は、A大学の学生を研究対象者としており、A大学のカリキュラムの影響を受けているため、他の養成所でも、学生が同じような背景で保健師教育課程を選択していると断定することはできない。また、研究対象者は、思い出しバイアスが生じている可能性がある。さらに、入学時は保健師を志望していたが、選抜試験を受験しなかった者の背景については明らかにできなかった。今後、保健師採用試験を受験して合格するまでの背景も調査することで、保健師志望学生の職業選択プロセスの

全容が明らかになると考える。

【利益相反】

本研究において開示すべき利益相反はない。

【謝辞】

本研究にご協力いただいた14人の学生のみなさまおよび、研究の遂行にあたり、多くのご助言をくださいました熊本大学名誉教授の上田公代先生に心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 厚生労働省：平成30年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況、就業保健師・助産師・看護師・准看護師。https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/18/dl/kekka1.pdf（2021年12月3日）。
- 2) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告。https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/08/18/1283190.pdf（2021年12月2日）。
- 3) 文部科学省：保健師教育における実態調査 平成29年度版。https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/15/1367161_5.pdf（2021年12月3日）。
- 4) 厚生労働省：保健師学校養成所における教育内容と方法に係る調査結果 第3回 看護基礎教育検討会 資料2。https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000352173.pdf（2021年12月2日）。
- 5) 倉林しのぶ：保健師を志望する学生の“地域看護活動”の認知度と進路選択への動機づけ。高崎健康福祉大学紀要, 6: 21-28, 2007。
- 6) 前田則子・児玉なぎさ：A大学看護学生の保健師志望の現状と課題。鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 18: 62-67, 2014。
- 7) 三輪真知子・高畑陽子・上田晴美他：A大学における学士課程保健師選択教育の現状と課題：選抜学生の意見を通して。梅花女子大学看護保健学部紀要, 7: 1-15, 2017。
- 8) 古城幸子・杉本幸枝・澤田由美：看護大学生の進路選択・決定要因；大学のキャリア支援の課題。第46回（平成27年度）日本看護学会論文集：看護教育, 103-106, 2016。
- 9) 吉岡由喜子・山本純子・高木みどり：看護大学生の職業意識の特徴：1・2年次生の自我同一性と看護職の就業動機の調査より。太成学院大学紀要, 14: 255-266, 2012。
- 10) 高橋美砂子：本学における選択制保健師教育の現状と今後の課題。桐生大学紀要, 26: 65-70, 2015。
- 11) グレグ美鈴：質的記述の研究。グレグ美鈴・麻原きよみ・横山美江（編著）、よくわかる質的研究の進め方・まとめ方；看護研究のエキスパートをめざして, 54-72, 医歯薬出版, 東京, 2013。

- 12) 白鳥さつき：看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセス構造. 日本看護研究学会雑誌, 32(1) : 113-123, 2009.
- 13) 鈴木 翔・金澤貴之：高校生が持つ自己の将来像と進路探索行動が進路選択に与える影響. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 65 : 135-143, 2016.
- 14) 保健師教育機関協議会：保健師を目指す方へ. <http://www.zenhokyo.jp/foryou/index.shtml> (2021年12月3日).
- 15) 本多陽子・落合幸子：医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み；進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討. 茨城県立医療大学紀要, 11 : 45-54, 2006.
- 16) 西岡久美子・中谷信江：「学生を巻き込む」を取り入れた授業を受講した学生の受講体験に関する現象の検討. 日本医学看護学教育学会誌, 22 : 7-11, 2013.